

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 146号

平成26年6月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (8)

(「石館守三先生金曜会語録」より (4))

母

塚本先生の言葉：若い時見えるのは一部である。年をとると良いことは、山のように高い所へ登れば登るほど広い視野が見えてくることである。人生の見方が広く遠くまで見えてくるのである。小西先生の話に同感。

最近日本人の母という問題について考えていたが、『きけわだつみのこえ』をふと読んで偶然母のことが書いてあった。涙なしでは読めなかったが、その一部を読む。……

「世界を支える手は英雄や詩人の手ではなくかよわい母親の手である」と内村先生が言われた。そして真理を授けることが子供への最大の遺産であると語っている。今頃の人は人生の真剣さというも

のを余り体験していないのではないか。どちらが得かということしか考えていないのではないか。昔の人は60歳になったらよぼよぼになっていた。それは日一日真剣に生きていたからである。今頃の人はうまいものを食べてのんびりしているから長生きしている。ただ長生きするのが意味あるか。ここで読んだ人は26歳で死んでいる。惜しいことだ！ 又こういう母の犠牲なしに本物は生まれて来ない。こういう親が日本を築いた親である。長生きすることが問題ではない。

しかしこういう青年が国のために死んで行かねばならなかったということはそう簡単に説明出来ない。そこには深い摂理があろう。我々は最善の力を尽して人生を処理しなければならない。

(昭和39年5月15日 金曜会)

自分のモットー

人生の体験からにじみ出たものが真理である。分からないままに謙虚な態度で真理を求めなければならぬ。今日朝食時に次の様な話をした。不具の子供のために自分の一生を捧げる母親がある。不可避な不幸を持つ人とそうでない人があるのは何故か。私にはわからないが一つのことを言える。即ちこのことは健康な者に対する戒めとなっている。

この世には真の審判はない。もし人生を正義と愛が支配するならば即ち来世があるということになる。真理に対するドアを閉ざさないようにしてほしい。

自分のモットー。自分にふりかかる仕事、難問から逃げようとしないこと。逃げようとすると不幸が来るし、取り組めば必ず光明と解決の道が現れる。

(昭和 39 年 5 月 29 日 金曜日)

阪井先生の思い出

発表してなかった阪井先生の思い出話を一つお話ししたい。私は阪井先生の印象が沢山ある。わたしの結婚式に阪井先生がお忙しい中を出てくれたが私には全く予期していなかった。私と阪井先生の間には個人的なつきあいもなく、聖公会の方も関係はなかった。私はむしろ儀礼で招待状を出した。阪井先生は私のために丁寧なお祝いと祝辞を述べてくれた。「石館君は薬学を修められてその方面で優秀なことは誰でも認める。しかしそれだけでは足りない。同志会で人格を練磨されたことが大事なのだ。私はそれをお祝いする。

私のもう一人の恩師朝比奈先生は、学問に対して非常に厳しい方で私の学問に骨を与えてくれた。この人の人生観はちょうど芸術家が芸術品を残すように学者は学問を残さなければならない、「寸暇を惜しんで勉強せよ」ということであった。自然を愛し、自然から造物者の心を学ぶという態度であった。弟子の結婚式なんかには決して出席しない。私の結婚式にも、「おい、石館君。僕は出席しないよ」と言われた。

阪井先生に出てもらって、私に対してたいして義理もないのに忙しい身でありながら出てくれたのが非常な私の励みになった。時間

から言えば非常に不経済ですが、心から若い人のスタートを祝福してやることは1頁の論文を書くより尊いことを阪井先生から感じた。それで私も結婚式によばれた時には出席するように努めている。

阪井先生は東大出身ではなく苦学して勉強された方、結婚も40歳になってからであった。別に東大と関係のない人であったがキリスト教の精神がなくては日本は成り立たないのであると考え、結婚を犠牲にしてアメリカに渡り友人たちを説いて同志会設立のために基金を集められた。先生がかく同志会に献身されたことが先生のご家族にも恵みを与える。

(昭和39年6月12日 金曜会 阪井会長追悼会)

大学は人々を無知から解放する

内会員の話を活発にせよ。最近感銘深かったこと——ケネディの演説集。「この世において最も美しい場所は大学である。建物が美しいとか芝生が美しいとかいうことではない。何故なら大学は真理を探究するところであるから。大学は人々を無知から解放する」研学の精神があって初めて大学たりうる。同志会はそれにプラスするものがなければならぬ。

(昭和 39 年 10 月 30 日 金曜会)

知識、理性の判断には限界がある

Paul Tilich (パウル・ティールリッヒ) が言った如く宗教は文化の内容であり、文化は宗教の形態受肉でなくてはならぬ。そのことも人生を歩んで行かれる間に感得して行かれることと信ずる。学んだ知識、理性の判断には限界がある。最も計画的に進んだ人生も容易に破られる限界を持つ。人生の戦い、理性で知り得ぬことにぶつかる時何をもって判断するか、私は神より与えられた言葉以外に頼れるものはないと思う。そしてそのことについて同志会で学ぶ機会を得たのは何にもましてめでたいことであると思う。その意味で同志会は「心のふるさと」と言えよう。

(昭和 40 年 3 月 12 日 金曜会 予餞会)

目に見えない真に価値ある結果を待て

矢内原全集に出ているが、満州での医療に生涯を捧げたクリスティーは、友人、師の度々の引きとめ、説得にもかかわらず「真の愛を知らぬ満州人に、報いはなくとも満州人を愛している外国人が一人でもいることを知らせるのだ」と言って始めて乗り込んで行ったのである。そして終に試練を乗り越えた。その結果彼のあとを継いで満州に行く宣教師がふえて来たのである。目に見える結果を求めることであってはならぬ。医療を施したとか恩恵を与えたとかいうことで真の平和は来ない。医療水準が上がったとか結核が減ったとかいうことを最高の目的とするな。そういうことがなくともやっていることが無駄のように思えても、目に見えない真に価値ある結果を待てと言って医療団を激励するつもりである。

(昭和 40 年 4 月 30 日 金曜日)

先人の信仰を学ぶことが大切

実践的な愛の行為は、母の最大の Role(役割)であり天性でもある。実践がなければ信仰でない。母が子供の苦楽を共にするのは、キリストの贖罪につながる愛である。自分の力の限界を感じるところで人生における様々な選択を迫られてくる。

学生時代のように頭の中の神学的な真の実践のない信仰では駄目、又唯信ずるだけではだめ。人生の voyage (航海) を経てきてやっと本当の信仰が分かる。従って先人の信仰を学ぶことが大切である。

(昭和 40 年 5 月 21 日 金曜日)

キリスト教は人間の側が作った慰めか

F兄が宗教の必然性がどこにあるのかと悩んでいるが、これは基本的な問題であるから、皆で話し合ってみたい。一生つきまとう問題であるから人生を闘ってきた人達から答えを取り出していくのが一方法であろう。

キリスト教はなければならぬという必然性から生まれたものであるか。人間の側がつくった慰めであろうか。原始宗教から考えてみても人間の避難所ではないかと考えられる。生きていく上に都合がいいもので人類以前からあるものではないか。小西先生の提起した問題よりも一つ前の問題であるが、これは実に重大な問題で一人では考え切れまい。人生観全体にかかる問題である。もしこれがしっくりしなければ死んだ信仰になる。命がけの信仰とはならない。神から離れた生存としてはこのような疑いは当然出てくるもの。

私もそれと闘いつつ生活していることは告白せねばならない。例えば炭鉱の爆発がある。昨日までよきパパであったのが今はもう帰らなくなってしまった。家族を慰めようがない。正義と愛を司る神ならば何ゆえにこのようなことをなさるのか。我々の目には悪人とみえる人が世の中で尊敬されるという矛盾。「お前の神はいずこにあ

りや」。「何故不幸な病気、かたわの人が生まれなければならないのか。我々は頭をたれて服従するほかない。仏教的に言うならばアキラメである。

私が問題にしているのは神学ではない。神学は学問であってひっくり返ることもある。我々自身がどう生きるかどう生きて来たかが問題なのである。この問題について話し合いたい。……

他宗教との関係は比較宗教学には問題でなかろう。どちらがどんな strong point (長所) を持っているとか weak point (弱点) を持っているかなどは信仰とは別の問題だ。証明しようとするれば人間が生きている限り果てがないだろう。信仰はそういうものではない。宗教の道義性は、どれも似ている。モーセの十戒と共通している。

大事なことは我々の合理性についてもっと謙虚にならなければいかんということだ。物の本質が合理性だけで説明できるかといったら出来ないに決まっている。分からんから信じないというのは不合理なんだが、自然科学者はそこを自分の限界を知っているから分離して考えるが、たちの悪いのは人文科学の連中だ。論証によってこの問題は解決される問題ではない。

なにゆえキリストを神と信じるか。ここが大切だ。よき宗教は皆同じことを教える。これは旧約時代まではそうであった。しかし新約における著しい問題がある。キリストの十字架と復活である。キリストが万物を支配していることが信じられるか。十二弟子は主だと思って信じた。しかし十字架の時には見捨てて離れ疑った。そして復活の主に触れたとき愕然となった。全く信じきっていたとみられる十二弟子にしてこうである。我々の頭で信ずることは出来ない程のことである。

ここは私の信仰の決断の one point (一点) である。これが真実でなければ他の宗教と同じことである。もしこれを信じなければ道徳も平等も全て便宜上のものである。正義・愛・生きる価値は信じるところにある。論理の謎はいつ変わるか分からん。身をもって証した人々の中に真実を認めていくのである。

(昭和 40 年 6 月 4 日 金曜会)